

日本の戦略文化と戦争

西川 吉光*

軍隊と日本社会

本紀要前号で指摘したように、昭和前半期の日本軍が採った人命軽視の攻撃偏重主義や必死必殺の体当たり攻撃は、現代日本人の価値観とは大きくかけ離れたものである。ではこうした軍の方針は、国民の声や感情を無視して強制威圧の下に遂行されたのかといえば、必ずしもそうとは言い切れない。

戦前の日本社会では、時に軍部以上に好戦的で強硬排外的な世論が力を得たことも多く、特攻に対しても、散り行く青年を悼みながらも、戦局の悪化に鑑みこれをやむなしと受容する雰囲気は当時を支配的であった。闘いの流儀や戦の仕方、軍隊、戦争に対する意識は、その国の文化や社会構造、国民性等の投影である。それゆえ特攻を語るに於いても、国家システムや軍隊の特性に留まらず、その背後に控える日本の文化や民族性、社会構造に目を向ける必要がある。

1 軍隊国家の社会構造

・近代化の工場

維新政府による国民皆兵と富国強兵政策の採用は、日本社会に占める軍隊のウエートを非常に大きいものとした。入営する青年は軍事技術だけでなく、文章の読み書きや人前での発言、規律、近代的な時間秩序、集団動作、衛生観念等々社会人として必要な常識を軍隊で教え込まれた。明治期の軍隊は日本近代化の工場であるとともに、国民の学校でもあったのだ。大正期には軍縮・反軍のムードや大正デモクラシーによる人権・民主意識の高まりを受け、社会における軍隊の位置づけも揺らいだが、それでも未だ経済後進国の日本では、職業提供の場や社会的地位を上昇させる契機として軍隊の価値は依然高かった。本来厳しい階級社会でありながら、庶民の中には平等社会としての軍隊を評価する風もあった。貴族制社会を基盤とした西洋諸国の軍隊とは異なり、日本軍には身分・出自による差別が少なかったことによる。試験に合格すれば誰でも兵学校への入学が許され、大将や元帥をめざすことができた。

荒木貞夫陸相は「皇軍の階級は、社会上の階級とは全く別で、いわゆる“地方”ではどんなに高い階級の者でも、軍隊に入ったら軍隊の階級序列に従わねばならない、それが日本軍隊の大きな特

*東洋大学国際地域学部：Faculty of Regional Development Studies, Toyo University

徴でもあり、強みでもある」(『皇国の軍人精神』)と述べている。大金持ちの息子も貧乏百姓の三男も、あるいは帝大卒だろうが小学校しか出ていなかろうが、徴兵検査で入隊すれば皆同じ兵営に暮らし、同じ階級、同じ扱いを受けた。

「将校は貴族、水兵は貧民」の英国海軍に範をとった海軍の場合も、陸軍程の平等性はなかったが、差別待遇は専ら軍隊内部の階級によるもので、将官と兵の出身階層に大差が無い点は英国海軍と決定的に異なっていた。日本の軍隊では、大学出だろうが小学校しか出ておらなかろうが徴兵で入隊すれば皆同じ兵卒であって、一般社会の学歴は物を言わず、個人の才覚や要領で兵舎生活の力関係は決まった。高等小学校卒の松本清張は大学出のインテリとは違い、「ここ(軍隊)にすれば、社会的な地位も、貧富も、年齢の差も全く帳消しである。みんなが同じレベル」に置かれ、こうした新兵の平等が奇妙な生甲斐を与えてくれたと、軍隊生活を肯定的に述懐している。学歴がなく、勤務先の朝日新聞社で差別されてきた彼にとって、己の実力で生きていける兵隊生活の平等性は魅力的に映ったのだ¹⁾。

・高い軍隊への親和性

しかも兵役や軍事教練、あるいは在郷軍人会(明治43年設立)等の組織を通して、軍隊は市民生活や地域社会と密接な繋がりを保っており、国民は同じ権力組織である警察よりも軍隊に親近感を抱いていた。日露戦争後の焼打ち事件や米騒動も、民衆暴動の鋒先は常に警察であって軍隊には向けられていない。軍隊の方が天皇に近い位置を占めること、学校や職場としての魅力や疑似平等性が歓迎されたことによるものだが、他方国民的な基盤を持たない警察には、官僚的色彩が濃く、国民を監視・取締り、時に暴力さえ振る組織との否定的な認識が強かった。ゴースト事件(1935年)が示すように、民衆を押えつける警察権力への対抗勢力として軍隊を肯定評価する傾向が庶民にはあったのだ。

戦争への坂道を転がり落ちた昭和の前半を、今日では“暗黒の時代”と認識するのが一般だが、軍部の独裁や政治支配、物資の欠乏等から国民が軍部に反感を抱いたと考えるのも早計だ。満洲事変がもたらした景気拡大を国民は歓迎した。軍隊は経済恐慌を吹き飛ばす救世主として評価された。その後、大陸での戦争の長期化は軍部に対する不満や鬱屈感を国民の中に生み出したが、これも真珠湾攻撃の成功や南方攻略が一挙に吹き飛ばした。宣伝や学校教育の影響が大きいことは言うまでもないが、軍隊は対外発展の原動力であり、軍隊が強ければ日本は豊かになるという発想が明治以来の民族体験の中で国民に染みついていた。軍部の横暴や、威張る軍人への反発は無論あったが、強い軍隊に協力すれば自分たちの生活も向上するという期待感も高かった。それに何よりも、徴兵検査を受け「甲種合格」となり、軍隊の飯を食って来なければ一人前の男と認められなかったのが昭和期日本社会の一般認識であった。

こうした当時の日本人の軍隊に対する絶大な信頼感が、軍部に協力し、無理と知りつつも軍の指示に従う途を選ばせた。それは逆らうことの出来ない命令や義務というだけでなく、国民的な善行と受けとめられた。軍隊への信頼感があってこそ、将兵も一般国民も挺身的な行動を厭わなかった

のである。戦後、敗戦に至る全ての悪役は軍部・軍隊であり、国民はその被害者とされ、それを当然の前提とした歴史教育の徹底によって、今の日本人には既に理解困難となっているが、実態はそう単純なものではない。一部知識人や思想家の著したものだけで、当時の平均的日本人の軍隊・軍部に対する認識を見誤ってはいけない。兵士が世間を“娑婆”と呼び習わしたように、軍隊は一般社会と隔離されてはいたが、兵営における行動規範は社会や風土の反映であり、逆に日本社会もその中心に位置した軍隊から色濃い影響を受けた。軍産国家日本では軍隊が全ての基軸となり、軍隊と社会は同心円的に回転をしていたのである。

2 民族精神：大和魂の誕生

・開化運動から国権論へ

維新後、新政府は版籍奉還、廃藩置県、学制や地租改正等矢継ぎ早に改革を断行し政治的統一の基礎を固めるとともに、産業技術や社会制度等西洋文明を積極的に摂取、近代化の推進によって富国強兵の国造りをめざした。これに伴い文明開化と呼ばれる新しい思潮が生まれ、儒教・神道が排斥され、民主・自由・個人主義の近代西洋思想が唱導された。その中心が、福沢諭吉、森有礼、加藤弘之、西周ら洋学者で組織された明六社だった。その一方、士族の新政府への不満は征韓論や自由民権運動を生み出した。しかし政府の弾圧と上からの国会開設で、明治も半ばを過ぎると民権運動は下火に向かい、一方で、開花運動（欧化主義）への反発も強まった。急速な開花と西洋思想の蔓延が国家の独立保全や民族の個性を失わしめているとの疑念や、幕末には外部脅威であった西洋文明が開花運動で内在化し、君民間の主権抗争や労資対立等内部から国の存立を脅かす因子となりつつあることへの危惧が高まったためである。

西洋本位の近代化にひた走るか、伝統本位への復権をめざすかの路線対立は、日本を洋の東西いづれの一員と位置づけるのか、自己認識に関わる問いかけでもあったが、折からの朝鮮問題が契機となり、民権論者の中には国権の拡張を唱える者が現れた。天皇の権威を利用した“上からの国民統合”ではなく、国民のナショナリティに対する自覚に基づいた内面的変革を伴う“下からの国民統合”を進め、国家的利害と国民的利害を合致させてこそ国際圧力に抗し得る真の国力が備わると説く国権論は、条約改正を巡っても欧化論と鋭く対立した。さらに日清戦争の勃発とその勝利が、現実の政治や思想界に大きな影響を与えた。それまで政府と対立していた民党は開戦と同時に政府攻撃を止め、臨時議会は1億5千万円に上る軍事予算案を全会一致で承認し、わずか4日で閉会する。

福沢諭吉は自ら主宰する『時事新報』の社説で日清戦争を「文野の衝突」と捉え、日本を「文明人道の保護者」と位置づけた。また報国会を結成して拠金活動の先頭に立つが、その趣意書には「帝国臣民たるもの、豈其勇武以て軍務に当り、勤儉以て軍資を継ぎ、我大日本国の権利を保全せざる可けんや」とあった。徳富蘇峰は『大日本膨脹論』を刊行し、日清戦争の「最大の戦利品」は「大日本国民の自信力」だと述べ、膨脹的日本こそ日本の国民的性格であると断言し、自由貿易論に立

脚する平和主義から帝国主義の支持へと立場を一変させた。高山樗牛も日本主義を唱えて我が国の大陸進出を肯定、日本の中国分割に批判的だった陸羯南もロシアの満洲占領を機に対露強硬論に転じていく。蘇峰の主張に見られる如く、日清戦争を通じ「日本及び日本人」としての意識が大衆に普及浸透していった。近代に入り初めて体験した対外戦争が、日本人に国民的自覚を呼び覚ましたのである。日露戦争の英雄が東郷や乃木大将、広瀬、橘中佐等高級士官で占められたが、日清戦争で讃えられたのが三浦虎次郎や木口小平といった一兵卒であったことは、戦勝の武勲が職業軍人の専有物ではなく国民全てが等しく頌ち持つとの自負心の高まりを示している。

・古代回帰と儒教倫理の復古：「天皇教」の導入

それと同時に、大日本帝国憲法の発布（1889年）によって天皇の権威が高まった。富国強兵を推し進めるには集権的国家体制の確立が不可欠であり、それを支える政治的バックボーン、つまり国家統治の正当性原理として天皇制が強調されたのである。また西洋諸国ではキリスト教が国民精神の機軸役を果たしており、我が国でも国民統一の思想倫理が必要とされたが、日本にはキリスト教の如き創唱宗教は無い。そこでその代用品としても天皇制が利用された。明治政府は国家統治の原理に留まらず、個人倫理の確立にも天皇制を利用したのである。

政治（世俗）と内面（精神）の双方が天皇制の下で収斂統一されたことで公と個は渾然一体化し、両者の分離は困難となる。こうした思惟の体系は家父長制国家においてしか成り立たない。それゆえ天皇は臣民の父にあたり、臣民は天皇陛下の赤子とされたのである。忠と孝の間には矛盾、対立が生じるが、すべてを親子関係という単一の論理で説き包み糊塗曖昧化された。家父長国家の頂点に立つ天皇は政治的な権威・正当性を持つだけでなく、国民一人一人の内面を支配する精神的権威でもあるから、西欧流の立憲君主と同一であってはならず、その存在は絶対でなければならなかった。

以後、尊皇と忠君愛国、それに家父長国家の論理が政体や民族（国民）の精神、道徳、国家観念の軸となり、官製のアイデンティティともなっていく。しかし一方で立憲主義を取り入れながら、同時に民族精神の急速な統合一体化を実現すべく、儒教の忠孝倫理や後期水戸学以来の国体論を政治の基礎に据え、古代君主政を理想像に掲げるとともに個人の内面領域をも国家が支配するという矛盾、跛行的な近代化は、その後の我が国の進路に大きな影を落とすことになった。

・コンプレックスとしての精神優越意識

ところで明治期の論客識者の多くは、開花主義者も国権論者も、さらには内村鑑三のようなキリスト教徒も自らの内面規律に士道の精神を据えていた。集権化を急ぐ明治政府は天皇親政の古代主義と忠孝の儒学論理を取り入れたが、軍人は無論のこと、知識人や政府指導者の精髓にも、江戸期における武士階級の倫理である士道の思想が脈々と受け継がれていたのである。西洋文明の成果は模倣、導入するものの、人間精神では東洋、特に日本のそれが西洋を圧するという和魂漢才や和魂洋才、「東洋道徳、西洋芸術（技術）」（佐久間象山）の意識も彼等には等しく共有されていた。

いくら西洋の知識を理解習得しても、西洋人そのものにはなれぬ冷厳たる現実に直面し、あるいは自由と平等を説く一方で、西洋諸国が西洋以外の地で見せる侵略主義と白人優越主義を目のあたりにするなか、精神力の卓越性に軸を置いた民族意識が強まっていく。この日本の精神に対する自負の意識は、後進国としての民族コンプレックス克服の代償的思准であったが、中華帝国に対する勝利がもたらした民族主義の高揚を機に一層の先鋭化を見た。そして新渡部稲造が火をつけた日露戦争前後の武士道ブームを受けて「武士道」の名を以て自賛されようになる。

しかしこの明治武士道は、藩主ではなく天皇への忠節を説き、また江戸期の士道とは異なり松宮観山、熊沢蕃山等の反儒武国論、水戸学に範を求めるもので、特に山本常朝の『葉隠』を取り入れ、忠義のために“死を恐れぬ精神”として喧伝された。徳川泰平の代に死を強調する葉隠の論理が生まれたのは、自墮落を防ぎ“生の充実”を狙うことに真意があったが、これを文字通り“死を受容する”論理として取り込んだのである。もっとも、武士という階級は維新で否定されており、特定の階級にのみ機能する倫理規範を国民全体の精神となすことにも抵抗があった。国民皆兵の下、兵士の大半は農村や商家の出である。彼らにいまさら新政府が倒した“武士”の名を冠した倫理を直裁に説くわけにもいかない。そこで武士道に変えて広く用いられ、定着していった呼称が大和魂であった²⁾。

・驕慢さとアジア蔑視意識：不敗神話の背後にあるもの

大和魂の概念は、平安期に用いられた本来の用法（世故に通じ世馴れている才腕）と大きく相違し、「大和心」とも異なるものであった。また武士道よりも遥かに曖昧かつ多義的であったが、逆にその汎用柔軟な概念規定故に、農民や商人等一般社会人に広く受け容れられたといえる。それを兵士・軍人に宿る精神と狭く解する向きもあったが、中勘助の『銀の匙』の中に「（日清）戦争が始まって以来仲間の話は朝から晩まで大和魂とちゃんちゃん坊主でもちきっている」とあるように、日清日露戦争を機に、日本人全体の精神的至高性（精華）を示す言葉として普及し、やがては日本民族の精神的アイデンティティの地位を得るのである³⁾。

大和魂は日本民族の自信と矜持の表明であったが、劣等意識に根ざす意識でもあったため、その後の日本の進路に大きな問題を与えた。日露戦争後の1908年、夏目漱石は『三四郎』を発表する。この作品の中で主人公の小川三四郎が見知らぬ髭の男に「これからは日本もだんだん発展するでしょう」と語りかけると、この髭の男が「滅びるね」と吐き捨てるように答える場面がある。髭の男は漱石の分身にほかならず、彼の口を借りて漱石は、日露戦後の日本に台頭し始めた「一等国意識」に警鐘を鳴らしたのである。それは日本一等国の発想の中に、いまやわが国は英米と同等の国になったという達成感と、中国や朝鮮は日本よりも劣等だという二つの意識が込められていたからである。前者は西洋に対する劣等感の表明でもあり、そのコンプレックスがアジア蔑視意識を生む。列強へのキャッチアップに成功したとの認識は、今後それら大国とは対等の関係を持つべしとの発想に通じ、他方、アジア蔑視は日本がこの地域の覇者たるべしの認識を定着させる。この“驕り”が日本の進路に及ぼす悪影響を、漱石は危惧したのである。

漱石が『三四郎』を発表したのと同じ頃、在米の政治学者朝河貫一は『日本の禍機』を書き終えた。朝河は、日露戦争とは極東に向けられたロシアの侵略的な野心に日本が自らの生存を賭して立ち上がった正義・防衛の戦いであることを米国人に説いて回り、この戦争への支持を訴えた人物である。その彼の手になる同書は、日本人に向けた警告の書であった。日露戦争で勝利した後の日本人に、民族としての自身や誇りに留まらず驕慢、増長の意識が生まれた。それまで国際社会の優等生であった日本がこの戦争の後、大きく変貌し始めたことに危機感を抱いた朝河は、その愚を説くためにこの書を書き上げたのであった。

漱石や朝河が危惧したとおり、この驕慢さやアジア（特に中国）蔑視の優越意識は、一方でそれまでの欧米との協調をかなぐり捨て、他方で劣等アジアへの野心と膨脹を拡大させ、わが国を破局へと導くことになる。昭和に入ってから国際社会における日本の孤立は、実に日露戦争後の民族的な増長自惚れの意識に端を発していたのである。また漱石や朝河が危険視した一等国意識は、日本不敗の意識と神話を生み出した。世界の大国である中国とロシアを相次いで破った日本は世界最強国家の一つであり、もはやアジアで我と肩を並べる国などない。それを可能にしたのが武士道精神に基づく大和魂だとの発想が日本社会に拡大、浸透するなか、軍部は一層の攻撃至上主義と精神力の強調に走った。日本不敗の意識や神話は軍内部の戦術、用兵面での自賛に留まらず、広範な大衆的基盤を獲得し、無敵不敗の神国思想となって国を覆い尽くす。こうして一部の指導者や軍部だけでなく、国民全体が譲歩や屈伏、戦争での敗北を受け容れられない体質になっていくのである。

・民族精神の自壊

大正～昭和に入り日本の国際的地位が高まり、同時に我国への諸外国からの圧力も増すにつれて、西洋に対する精神的優越の意識（精神文明は物質文明に勝るという思考）、即ち「和魂洋才」と、戦勝で掴んだ「民族としての自負」を基盤に、国力貧弱の中で対外膨脹を支える不敗神話と攻勢主義のエトスとして強調された大和魂は、広く外界に目を向けぬ視野狭窄症とファナティックな精神主義を誘発させる温床ともなった。新政府の誕生で尊皇は実現したが、攘夷運動は挫折に終わった。その屈折した情念や屈辱感、エネルギーが復讐の機を窺いつつ地下に籠り、昭和期に欧米との対立が再び先鋭化する中で、民族的ナルシズムあるいはウルトラナショナリズムの源泉となり、大和魂の一部を形作る強烈な排外意識となって顕現したともいえる。

日本人が真珠湾攻撃を忠臣蔵に例えたり、対米戦争を民族の敵討ちと称したのはその故であった。特攻を勝敗を度外視した民族精神の発露と捉え、「彼ら（特攻隊員）の死は祖国の防衛のためというよりもむしろ、西洋という癩にさわってしようがなかった奴に対して日本人の意地を見せた、・・・自分たちは兵器や物量で負けても精神力では西洋に負けない。その証拠」が体当たり攻撃だという意識が働いたのも、同じ理由に拠るものである⁴⁾。だが、太平洋戦争の敗北と戦後における民族的過去の全否定の結果、近代日本における民族精神構築の大業は挫折に帰した。以後、日本人の精神や倫理の基底に穴があいたままの状況が、現在に至るまで続いている。

3 皇民教育

・学校・軍事教育の連携一体化

家父長国家の頂点に立つ天皇は、政治的な権威・正当性を持つだけでなく、国民一人一人の内面を支配する精神的権威ともなったが、官製の天皇教を国民に受容させるには徹底した教育が必要となる。そこで明治政府は教育勅語を發布し、国民教育の場を通して(1)政治システムとしての天皇制と(2)儒教的な忠孝の論理を用いての皇室崇拜と服従の精神、さらに(3)天皇中心の家族主義的国家観の浸透を図っていく。

そして日露戦後は精神主義の教育が軍隊で重視される一方、義務教育の場でも初等教育の段階から教育勅語を用いて臣民たる自覚を促すとともに、自己犠牲による忠君愛國・義勇奉公の意識が徹底的に教え込まれた。軍への信頼や畏敬の念、それに滅私殉国の精神を植えつける学校は、良き兵士になるための教育の場でもあった。知育に限らず、学校での体操は明治期から兵式が取り入れられ、大正に入ると中等学校以上の男子校に現役将校が配属され、軍事教練も開始された（1925年：陸軍現役将校配属令）。学校教育は軍事教育の前段階と位置づけられ、両教育は連動一致すべしとの認識が確立していくのである⁵⁾。

・軍神教育：溢れる滅私殉国の思想

学校での軍事志向教育の教材に用いられたのが、「軍神」伝であった。日露戦争の前年、国定教科書制度（小学校教科書の国定化）が発足し、「修身」、「歴史」、「国語」、それに「唱歌」を用いた忠君愛國・義勇奉公の教育が本格化する。修身の教科書には、喇叭手木口小平や水兵三浦虎次郎の逸話が掲載された。日清戦争成歎の戦いに於いて突撃喇叭を吹きながら息絶えた「キグチコヘイハテキノタマニアタリマシタガ、シンデモラッパヨクチカラハナシマセンデシタ」と小学1年生の修身教科書で取り上げられた。連合艦隊旗艦松島に乗り組んだ三浦虎次郎は、黄海海戦で瀕死の重症を負いながらも戦況を気に病み、通りかかった副長に敵の巨艦定遠が沈んだかどうか様子を尋ねた。副長向山少佐が涙をこらえつつ「まだ沈んではいぬが、定遠はもはや戦闘力を失った」と教えると、それを聞きながら三浦はニッコリ微笑んで絶命する。国を想う彼の振る舞いは、「勇敢なる水兵」として歌い継がれていく。

日露戦争では、広瀬中佐や橘中佐が軍神として登場する。軍神という呼び方は、日露戦争開戦当初、旅順口で戦死した広瀬中佐に用いられたのが嚆矢とされる。旅順を基地とするロシア艦隊を旅順港内に封じ込めるため、広瀬武夫少佐は数人の部下と老朽船に乗って所定の位置でこれを沈め、ボートで出しようとする。その時、杉野孫七一等兵曹の姿が見えない。広瀬は他の水兵たちをボートに移らせて、自ら沈みゆく船内を捜し回った（唱歌では「船内くまなくたずぬる三度」）が遂に発見できず、諦めてボートに移ろうとした時、露軍の砲弾が広瀬を直撃、ただ一片の肉片だけを残して姿を消したという。

海軍が作り出した軍神広瀬に対抗し、陸軍が生み出したのが橘周太少佐であった。静岡歩兵第

三四連隊の大隊長として橘は首山堡の戦闘に参加、傷を負いながらも最後まで指揮をとり、自軍を勝利に導き戦死を遂げた人物である。昭和に入ると、日中戦争では肉弾（爆弾）三勇士の犠牲的行為に国民は涙した。太平洋戦争が始まると、ハワイ奇襲の特別攻撃隊や加藤隼戦闘隊を率いビルマで戦死した加藤武夫、アッツ島玉砕の山崎部隊長等も軍神に列せられた。軍神とは別に、名も無き兵士や庶民を主人公とする「軍国美談」も戦前の教科書に頻繁に登場した。日清戦争での出征母子の哀話「水兵の母」、日露戦争を素材とした「一太郎やあい」等がそれである。

・戦功に優位する滅私の論理

一連の軍神や軍国美談の特徴は、勇敢に戦い立派な戦果、武勲を立てた人物を日本人の亀鑑として推奨するというよりも、国のため部下のため自らの身命を賭すことに些かの躊躇も見せず、積極的な行動をとるなかで散華した人物を讃えた点にある。勝ち負けや戦果の多寡ではなく、「勝敗に拘泥せず、大命の下に潔く死ぬこと」に日本人の理想的な生き様を求める教育方針である。

死して残す戦功よりも死ぬ姿そのものに価値を見出す姿勢は後述する日本の文化や民族性にも関わりがあったが、天皇絶対主義の確立という政治的要請の下、散り際の潔さを国民倫理の域にまで高めた教育や桜の花を軍国日本のシンボルとなすイメージ操作の力が働いていた事実は見落せない⁶⁾。求められた資質は、天皇への忠義、そのために死を恐れぬ強固な意志、そして自己犠牲を受け容れる覚悟の重視であり、楠木正成が戦前、格別重要な人物として取り上げられたのもそのためだ。正成は宰相坊門清忠の言葉を後醍醐天皇の言葉と受け取り、天皇のため、勝つこと叶わずと知りながらも足利尊氏を迎え撃ち、寡を以て衆に当たり湊川で討死した武将である。

戦時下最大の動員対象とされ最も多くの犠牲者を出したのは、敗戦当時10代後半～20代前半の層だが、この“戦中派”世代の幼少期には既に満洲事変が勃発、彼等は徹底した言論統制や皇国教育の下で学童生活を送った。己の栄達利益やさらには勝敗をも度外視して戦い死んでこそ天皇への忠義・忠誠度が高いと教えられ、またそのように信じた青少年にとって、特攻に殉じるとは自身が楠木正成に成りきることであった。海軍の沖縄特攻は菊水作戦と名付けられたが、菊水は楠木家の紋所だ。出撃時や部隊の旗印に菊水の紋所、楠公精神を掲げる者も多かった。特攻で死ぬことは、学校教育やメディア情報に基づけば、日本人として最高理想の生き方に殉じることには他ならなかったのだ。自由主義的な思想に触れる機会も与えられず、ただ滅私愛国の教えを純粹に受けとめた少年である程その思いは強く、齢を重ねても幼少期に植えつけられた価値観の払拭否定は難しかったのである。

4 メディアと戦争

・自主規制から積極迎合へ

ベネディクト・アンダーソンは、大量移民とメディアがナショナリズムを生み出したことを指摘したが（『想像の共同体』）、メディアの中でも特に大きな役割を果たしたのが新聞である⁷⁾。明治

以降近代化を急いだわが国も、事情は同じだった。没落士族の後裔が営む新聞は、自由民権運動とも連動し反権力的な色彩が強かったが、日清・日露の戦争を通じてナショナリズムの形成に深く関与し、それと並行して自らも発展拡大を遂げていく⁸⁾。大正デモクラシーの時代、新聞の紙面にも軍縮の推進等平和的な論壇が目立ち、その傾向は昭和の恐慌期に入っても暫く続くが、軍部の政治支配が強まるや論調は一変する。新聞は、国家のために自らの生命を差し出すべきことを日本人の美德であり義務でもあると説き、勇戦敢闘、華々しく散っていったと兵士の活躍を誇張的に伝えた。あるいは国民的英雄として次々と軍神を作り出し、彼等に続けと多くの将兵に死を強いた。昭和十年代の日本では、軍部の暴走をメディアが抑えるどころか、逆にメディア各社が競い合うように軍部迎合の報道に走り、排外的ナショナリズム（ジンゴイズム）を煽り、戦争の拡大と国家の自滅を招いた。

それまでリベラルな立場から軍部批判の論陣を張ることも希でなかった新聞・雑誌の多くは満洲事変を機に軍部寄りに姿勢を転じ、2.26事件以降は政府・軍部に対する批判は完全に紙面から消え去るが、メディアが軍部に迎合するようになった理由は何か。まず国家権力による言論機関への弾圧や圧力、報道規制の強化が挙げられる。政府による言論統制の根拠は治安維持法や新聞紙法、出版法だったが、日中戦争が始まると政府は軍機保護法によって規制を強化し、さらに国家総動員法によってメディアは国家の事実上の下部組織に組み込まれていった。政府や軍部の意向に盾突けば、諸法を根拠に即座に記事の差止めや発売頒布の禁止処分を受け⁹⁾、批判的な記事を掲載すれば忽ち紙やインクの配給を減らされる恐れもあった。用紙不足を名目に政府が業界の整理統合をちらつかせることは、新聞社への強力な脅しとなった。

戦局の緊迫化に伴い、記者への懲罰招集を恐れてメディアの側が自主規制に踏み切るケースも増えるが、軍部の仕掛ける不買運動も怖かった。在郷軍人会をバックに持つ軍部は、新聞にとって最大の顧客であったからだ。報道機関の一元的統制を急ぐ政府は、新聞社の幹部を統制機関に登用する等アメとムチを巧みに使い分け、メディアの籠絡にも怠りがなかった¹⁰⁾。そうした動きとは別に、日中戦争の拡大に伴い、国民の多くが戦況や兵士の安否情報を欲するようになった事情もある。読者の期待に応えるべく新聞各社は戦場に多数の特派員を送り込むが、前線の取材には軍の協力が不可欠であり、さすれば軍部に都合の悪い記事は書き難くなる。

政府・軍部の威圧や読者ニーズへの対応は、戦後、メディアが自らの戦争協力を自己弁護する際の口実となったが、紙面が軍部迎合・戦争賛美の記事で埋め尽くされた理由はそれだけではなかった。昭和前期、新聞各社は激しい部数の拡大競争を繰り返していた。他社との熾烈な競争に勝つため、新聞各社は客観的な戦争報道や冷静な認識の保持を国民に訴えるよりも、戦況報道に少しでも多くの紙数を割き、あるいは好戦的な時流に迎合して、胸のすく皇軍の活躍や兵士の武勇伝を頻繁に登場させるようになる。荒木貞夫のような皇軍精神の宣伝役とも積極的に連携し、日本は「正義聖戦の戦い」を続けており、「日本軍は不敗、日本兵は無敵」であり、中国兵を「悪逆非道」と罵った。肉弾3勇士や空閑少佐の軍国美談を作り出し、国民に滅私殉国を強要したのも新聞なら、ナチスドイツとの提携や三国同盟への支持、さらには反米英のムードを誘導し、太平洋戦争では米英

を「鬼畜」と罵り軍部を凌ぐ強硬論を吐いたのも、そして戦争末期に特攻を絶賛したのも全て新聞である。変質の実態は、弾圧や読者の求めに押されてのやむなき消極的な迎合加担に留まらず、自ら積極的に軍に擦り寄り、あるいは国民が歓迎する記事を作ら提供する能動的な戦争協力でもあった¹¹⁾。軍の意向を先取りし各社挙って迎合報道を重ねる過程で、メディアは無謀な戦争の共同推進者となっていった。

朝日新聞社主筆であった緒方竹虎は、戦後次のように書いた。

「筆者は今日でも、日本の大新聞が、満洲事変直後からでも、筆を揃えて軍の無軌道を警め、その横暴と戦っていたら、太平洋戦争はあるいは防ぎ得たのではないかと考える。それができなかったについては、自分をこそ鞭つべく、もとより人を責むべきではないが、当時の新聞界に実在した短見な事情が、機宜に『筆を揃える』ことをさせず、いたずらに軍ファッショに言論統制を思わしめる誘導と間隙を与え、次々に先手を打たれたことも、今日訴えどころのない筆者の憾みである。」¹²⁾

軍部に追従した新聞報道が好戦主義的世論の形成を促し、沸いた世論がより強硬な論調を新聞に求め、それに縛られて新聞が一層過激排外的な記事を送り出すことで、軍部のさらなる横暴独走を助長する悪循環の構図が生まれた。権力・国民双方に対するメディアの積極的迎合が、真実の報道を為し得ぬ状況に自らを追い込み、戦争終結機運の醸成を不可能ならしめたのである。

・殉国美談で埋め尽くされた大衆芸能

盛んに殉国美談を営業に取り入れたのは新聞・雑誌だけではなく、戦意高揚の情報操作は映画や演劇、音曲などの大衆芸能も同様だった。当時最高の大衆娯楽であった映画の場合、官民合同の映画支援管理組織である大日本映画協会が発足（1935年）、1939年には映画法も公布され統制の強化が進んだ。ナチスドイツの映画統制法を真似た映画法は、映画業界への飴と鞭で国策への協力を要請・強制することに狙いがあった¹³⁾。映画と併映された「同盟ニュース」や「日本ニュース」等のニュース映画も戦意を鼓舞し銃後の心構えや国民精神を教え諭す教材として活用された。

しかしこうした宣布統制の枠を越えて、大衆は戦記・皇軍を題材とした興行を大いに歓迎した。肉弾三勇士や空閑少佐の武勇伝が伝わると映画会社は競って映画化し、観客もそうした映画に殺到した。「どの映画館も肉弾三勇士や空閑少佐を上映しなければ、客が寄りつかない程の吸引力があった」¹⁴⁾。浪曲や浪花節が最も盛んに取り上げたのも、忠君愛国や仁義忠孝をテーマとした作品だった。新聞が建て前を伝える“表のメディア”とすれば、生活の息抜き、人間らしさを回復する“本音のメディア”が大衆芸能・大衆娯楽だが、この分野にも滅私殉国が深く入り込んでいたのだ。教育と各メディアの相乗効果で、公の規範たる戦陣訓が示達される以前に、既に大衆の中には捕虜への恥辱感や国のため命惜しまぬ攻撃精神が定着していたといえる。

やがて日中戦争の長期化や生活物資の欠乏から日本社会には重苦しい圧迫感が広まったが、その反動・捌け口はエログロ・ナンセンスに向かうばかりではなかった。映画演劇等から提供される好戦滅私のメッセージが触媒となり、抑圧や鬱積感を打破し撥ね除けんとする攻勢膨脹的のエネル

ギーや殉国精神の高揚が社会に溢れた。さらに対米開戦後は「ハワイ・マレー沖海戦」や「決戦の大空へ」、「加藤隼戦闘隊」等戦意高揚と航空戦力の重要性を強調した国策映画が相次いで封切られ、凛々しい飛行機乗りへの憧れを煽った。かくて好戦滅私のメディアで育った多くの若者は、国のため命を投げ出さんと予科練や少年飛行兵をめざし、さらに特攻を志願し、あるいは特攻命令を粛々と受け入れていった。彼等が自らの行動準則を思索する際、学校での教育と並んでメディアから与えられた情報や価値観に強く規定されたことは想像に難くない¹⁵⁾。そして彼等を送り出した一般の社会や大衆も、殉国を強いる特攻作戦を臣民の使命と受けとめたのである。

5 日本文化と特攻

・廉恥・自死・淡泊さの文化

体当たりや特攻を考察するには、軍隊が社会に占める大きさや、教育、メディアの影響だけでなく、日本の文化や国民性にも触れねばならない。よく言われるように、日本の文化は体面を重んじる“恥の文化”であり、生きて恥しめを受けない「廉恥の心」と自分の手で自分の命を絶つ勇気を認める「自死の美学」がそこにはある。武士道であれ士道であれ、さらには大和魂論にせよ、全てはこの「恥」と「自死」の上に存在しているのだ。

「葉隠」に「兎角武士は、しほたれ草臥れたるは疵なり。勇み進みて、物に勝ち浮ぶ心にてなければ、用に立たざるなり。人をも引立つる事これあるなり。」(聞書第一)とあるが、武士道の道徳が外面を重んじたことは、戦闘者、戦士の道徳として当然のことである。なぜなら戦士にとっては、常に敵が予想されているからである。戦士は敵の目から恥ずかしく思われたいか、敵の目から卑しく思われたいかという点に自分の体面とモラルの全てを賭けるほかはない。自己の良心は敵の中にこそある。自分の内面に引き籠った道徳でなくて、外面へ預けた道徳であることに武士道の特徴を求めている。何よりもまず外見的に、武士はしおたれてはならず、くたびれてはならない。武士道とは、しおたれ、くたびれたものを表へ出さぬように自制する心の政治学であり、健康であることよりも健康に見えることを重要と考え、勇敢であることよりも勇敢に見えることを大切に考える、このような道徳観は、男性特有の虚栄心に生理的基礎を置いている点で最も男性的な道徳観だと三島由紀夫は指摘したが¹⁶⁾、福沢諭吉が説いた「やせ我慢の心得」に通じるものである。

こうした体面重視の精神構造は、武士階級だけのものではない。同質性の高い日本社会における集団監視主義は、名を重視する儒学の影響も受け国民的な精神特性となっていった。そして、何かの事情で自らの名を恥ずかしめる事態に至ったならば、その生命を自ら断つことで恥の償いとする作法が確立していく。自死を以て責任をとる手法は肯定的に評価され、徳川時代には切腹が、武士社会最高の責任のとり方となる。ルース・ベネディクトは『菊と刀』の中で、他人を殺害する事件よりも自身を殺す事件を話題に乗せることを好むのが日本人の特徴と論じたが、立派に腹を切って死ぬことは、それまでの一切の不名誉を償って余りある行為と理解された。死者に鞭打たない風土、人間も死ねば皆神様となる風土もこの意識と関わっている。

この「恥」と「自死」に拘る風土の中で忠節、忠義を尊ぶ倫理観が育まれ、死して主君に尽くすことが武士道の華とされ、主君や藩のため自ら生命を捧げた赤穂浪士や白虎隊が国民称賛の的となる。それは死によって即物的な効果を勝ち取ったことへの称賛ではなく、忠義の対象である“公のため”に死ぬ行為そのものに意義を見出したのである。その代償として、たとえ身は死しても名は末代まで残ると讃えられたのである。「自死」の美学は、艦長が艦と運命を共にし、戦闘に破れた指揮官が自決する慣例となって日本軍の流儀に生き着いた。

さらに、日本人の淡白な気質や情緒性の高さも、その用兵・戦法に影響を及ぼした。四季の変化や台風といった自然環境が執拗を忌む日本的な気質を生み出したと説いたのは和辻哲郎だが、日本人の感情の高揚は執拗に持続する強さではなく、野分のように吹き去る猛烈さにその特徴があり、「反抗や戦闘は猛烈なほど嘆美されるが、しかしそれは同時に執拗であってはならない。きれいにあきらめるということは、猛烈な反抗・戦闘を一層嘆美すべきものたらしめる」¹⁷⁾。徹底した攻撃重視の一方で、日本軍はゲリラやレジスタンスといった粘着的な闘いを不得手とした。劣勢となるやすぐにバンザイ突撃に走り、少しでも長く持ちこたえて敵の進撃を食い止める持久戦を好まなかった。地味で長丁場となる守りの戦いは苦手なのだ。国力の弱さもあるが、日本人の粘りの無さや淡白な気質、気短な国民性も短期戦重視の用兵思想に繋がったといえる。「はかなさ」や「滅び易さ」は日本人の美意識や美学を構成する重要な要素になっており¹⁸⁾、それが「死に場所、死に際」に拘り、自決・玉砕の途を選ばしめたのだ。散華の美学を優先する日本人は、攻めるに長じて守るに弱い民族性の持ち主である。そして体面重視の禁欲主義や自死の称賛、滅びの美学からは、日本文化に潜むサディステックな一面を窺い知ることができる。

このような体質は、感覚的情緒的な国民性とも関係している。日本語の「潔く」に該たる適訳が英語に見当たらずに、敵対する相手に「腹（手の内）」を割って見せる日本流の潔さや、「漢の文は詭譎あり、倭の教えは神鋭を説く」「孫子十三編は懼字を免れず」等と孫子の兵法に「まこと」が無いと批判し、誠こそが兵術の根本であり、正々堂々誠を以て戦うべきと論じた開戦経の思考は、国際社会には理解されにくいものである。また、相撲における金星や“判官鼻貞”に示される如く、力の弱い者が圧倒的優位な相手に立ち向かっていくことに日本人は強い美意識を抱く。軍事合理性に照らせば無謀無意味な戦いも、情緒が支配する社会では逆に、勝てぬと知りながら敢えて強大な相手に挑む志こそが忠義であり英雄的な行為として絶賛される。

情念や思いを果たすための自棄的行為に、日本人は酔いしれるのだ。己を殺し集団との調和を図る日本的集団主義が生み出した「恥と自死の文化」や「淡白な国民性」、さらに儒教を基盤とした明治以来の「忠君滅私殉国の倫理」が、体当たりという自己犠牲の作戦を生み出し、かつそれを評価する社会的素地を作り出した。但し組織的な特攻には、命令による強制も多数含まれていた。それは自己犠牲を賛美する環境を悪用した殺人行為である¹⁹⁾。本来恥を知り責を負うて自死すべきであったのは、無謀な戦争に国家国民を引きずり込んだうえに、不利な戦局を打開もできぬまま惰性のように戦いを続け、徒に若い将兵を死地に追いやった軍幹部であって、特攻隊員ではなかった。

・繰り返され得る特攻

西洋の社会では、公に対する自己犠牲の崇高さはキリスト教の倫理が支えている。これに対し日本の場合は、宗教ではなく国民の生活意識や倫理、そして文化と密接に結びついている。

主君、国家への自己犠牲を評価する意識の根底に国民性や風土、文化が潜んでいるからこそ、忠義殉国を説く教育も可能となり、またそれが社会規範ともなり得るのであって、その逆ではない。国民の潜在意識に馴染まぬ規範は、いくら教育や宣伝を労しても定着しないものである。言い換えれば、教育の内容やカリキュラムが変わり、戦前の如き軍国殉国の教育が施されずとも、民族としての思惟や情念、社会意識、それに文化の基底が不変である限り、時代は移り変わろうとも、新たな環境の下で再び特攻のような体当たり攻撃が生起反復する可能性は高いと考えるべきだろう。“心優し科学の子”と唄われ、戦後民主主義時代の象徴ともなった鉄腕アトムも、最終回では太陽めがけて体当たりの自爆攻撃を行った。宇宙戦艦ヤマトでも同様の結末が描かれ、若い世代の感動と涙を誘った。

国家や社会の危急存亡を救わんとする自己犠牲的行為の湧発は、一つの民族文化とさえ言い得るものである。だが、他者志向の集団調和主義や“廉恥・自死・情念”の文化につけ込み、自発を装い他死を迫るが如き行為は断じて繰り返させてはならない。そのためにも、過去の極く一時期における例外教条的な事象として特攻を片付てはいけないのである。

●注釈

- 1) 「新聞社では絶対に私の存在は認められないが、ここではとにかく個の働きが成績に出るのである。・・・兵営生活は人間抹殺であり、無の価値化だという人が多い。だが、私のような場合、逆な実感を持ったのだ。」松本清張『半生の記』（新潮社、1970年）82ページ。貧しい孤児でも一人前に扱ってくれ、しかも文字まで教わる軍隊での生活を評価した小説に、棟田博『拜啓天皇陛下様』（光人社、1996年）がある。
- 2) 広瀬武夫や桜井忠温等日清・日露戦争に従軍した軍人の文書からは、彼らの精神的寄所がなお武士道にあったことが窺える。だが「小節の信義」を立て「私情の信義を」守ることなきようにと軍人直諭が警鐘を發している如く、天皇への大義を強調し旧藩主や俗人的支配者への忠節とならぬようにとの意図も、武士道の呼称が避けられた一因と考えられる。
- 3) 1882年に外山正一が「新体詞抄」に発表した「抜刀隊の詩」に、早くも「大和魂あるものの死すべき時は今なるぞ」の一節があり、86年には山田美妙が「新体詞選」に「戦景大和魂」を發表している。
- 4) 「日本が中国から撤兵しなければアメリカは日本に石油を売らないだなんて、なんて意地悪なんだろう」、「ルーズベルト大統領はまるで吉良上野介みたいな奴だ、という感じ方があったと思います。・・・日米交渉が行き詰まって、日本政府はアメリカとの開戦に踏み切らざるを得なかった、というところからストーリーを語るのは・・・アメリカの意地悪に耐えに耐えて止むを得ず日本は開戦に追い込まれた、という気分に基づくもので、正に忠臣蔵」であり、「その憎っくいアメリカに一太刀浴びせた真珠湾攻撃は、浅野が吉良に斬りつけた“松の廊下”」であった。佐藤忠男『草の根の軍国主義』（平凡社、2007年）227～8、235ページ。真珠湾奇襲作戦を立案した源田実は、真珠湾攻撃を「討ち入り」と呼んでいる。源田実『パールハーバー』（幻冬社、2001年）223ページ。清沢冽（さんずい）は、日記に「大東亜戦争は浪花節文化の仇討ち思想である。・・・何故に高い理想のために戦うことが出来ないのか」（昭和18年2月22日）、また、仇討ち思想に立つがゆえに戦争に対する態度も日清・日露戦争より反動的で、「俘虜取扱いに関しても、日露戦争を先例とせざる理由なのである」（昭和19年3月13日）と記している。清沢冽『暗黒日記1』（評論社、1970年）49ページ、同『暗

- 黒日記』（岩波書店、1990年）152ページ。
- 5) 帝国在郷軍人会『国民教育者必携 帝国陸軍』の「第三章 軍人精神と国民教育」では、「軍隊教育ハ国民教育ナリト謂ヒシ所以ニシテ、軍人精神ハ、恰モ国民精神ガ軍隊ノ上ニ現ハレタル反映ナリト謂フベシ」とする。大江志乃夫『国民教育と軍隊』（新日本出版社、1974年）311ページ。
 - 6) 小川和佑『桜と日本文化』（アーツアンドクラフツ、2007年）273～9ページ、牧野和春『新桜の精神史』（中央公論新社、2002年）205～7ページ。
 - 7) ナショナリズムの形成に新聞が果たした役割を強調するものに、マーシャル・マクルーハン『ゲーテンベルグの銀河系』森常治訳（みすず書房、1986年）、ガブリエル・タルド『新版世論と群衆』稲葉三千男訳（未来社、1989年）。
 - 8) 台湾出兵から西南戦争、さらに日清・日露の戦争報道を通じて新聞が対外強硬世論の形成に関わるとともに、自らの事業を拡大させた経緯は、鈴木健二『ナショナリズムとメディア』（岩波書店、1997年）11～130ページ。
 - 9) 満洲事変前後から、安寧秩序紊乱を理由とした新聞・出版の発売禁止件数は急増し、1932年には4945件（新聞紙法2081件、出版法2864件）とピークに達したが、以降当局の取締り強化とマスメディアの自粛で、34年1300件、35年には1074件と減少していった。前坂俊之『太平洋戦争と新聞』（講談社、2007年）34ページ。寺内内閣を批判する『大阪朝日新聞』を政府が発禁処分にした白虹事件（1918年）が、国家権力による新聞封じ込めの第一歩といわれる。戦中の言論弾圧としては『改造』『中央公論』が内閣情報局から自発的廃業の形で解散を命じられ、拷問による取り調べで4人が獄死した横浜事件（1942～45年）が有名である。
 - 10) 政府は1930年代半ばから新聞操縦や世論操作を一元的に行う国家情報宣伝機関の創設に動き、各省庁の連絡調整機関だった情報委員会を内閣情報部に改組（37年9月）、40年には内閣情報局に格上げし、報道宣伝の一元的統制を行った。44年には朝日新聞副社長の緒方竹虎が情報局総裁に就任している。また政府は日本放送協会や同盟通信社等国策メディアを発足させたほか、雑誌、書籍は日本出版文化協会に一元化させた。
 - 11) 軍部や政府の発禁処分を避けるため、新聞各社は社内に記事査閲の部局を設け、自らの手で記事原稿の検閲と削除を行うようになった。1943年秋、朝日新聞社専務原田譲二は、社内会議で記者たちに「情報局の検閲に頼ることなく、査閲に委すことなく、自分自身が完全なる検閲官でなければならぬと思ふのであります」と訓示している。朝日新聞「新聞と戦争」取材班『新聞と戦争』（朝日新聞社、2008年）479ページ。
 - 12) 緒方竹虎『一軍人の生涯：提督米内光政』（光和堂、1983年）。
 - 13) 岩本憲児編『日本映画とナショナリズム 1931-1945』（森話社、2004年）20ページ。映画法の骨子は①映画製作と配給の認可制②製作従事者の登録制③脚本の事前検閲④外国映画上映の制限⑤映画事業への国家による強力な命令権⑥文化・時事・啓発宣伝映画の強制上映等であった。統制強化を狙う映画法制定に映画関係者の反対意見はなく、むしろ積極的に受け容れたという。NHK取材班編『日本の選択4：プロパガンダ映画のたどった道』（角川書店、1995年）174ページ。
 - 14) 清水晶『戦争と映画』（社会思想社、1994年）24ページ。
 - 15) 東大経済学部から43年12月に学徒招集され、谷田部航空隊に配属、45年4月、喜界ヶ島海上で特攻戦死した佐々木八郎は、43年2月、前進座で『忠臣蔵』を観劇し、何もかも捨てて、ただ一筋主君の敵を討つ目的に全てを捧げた四十七士に感動の涙を流している。大貫恵美子『学徒兵の精神誌』（岩波書店、2006年）97～8ページ。
 - 16) 三島由紀夫『葉隠入門』（新潮社、1973年）52～3ページ。
 - 17) 和辻哲郎『風土』（岩波書店、1963年）136～7ページ。
 - 18) 「世界中の文学に共通のテーマである人間存在の「さだめなさ」が、美を生みだすに必要な条件であることは、日本以外の文学では、滅多に認められたことがない。日本人は、それを知っただけではなく、そのはかなさが最もはっきり現われている様々な美への愛を表現して来たのである。……武士の理想は、老兵となって、ゆっくり消えて行くのではなく、その体力と美との最高潮点において、劇的な死に方をすることだったのだ。」ドナルド・キーン『日本人の美意識』金関寿夫訳（中央公論新社、1999年）35～6ページ。
 - 19) 日本社会では、失敗の償い、あるいは自分が属す集団のため他の方法では望みがないと感じられた難局を

解決するために自死（自決）を選ぶ伝統があり、国家あるいは全うな抗戦能力を失い組織のレゾンデートルも面子も失われつつあった軍を救うための集団自決として特攻を捉える立場もある。加藤周一他『日本人の死生観（下）』（岩波書店、1977年）225～8ページ。だが特攻の大半は命令による死の強制にほかならない。軍の体面を保つ、あるいは戦勝を得られなかった償いとして自決すべき立場にある幹部が、自らの死を青年に押し付けた行為というべきである。